

上野国・戦国時代その5 戦国末期から徳川政権へ

群馬用水は群馬県北部を流れる利根川本川（沼田市）から取水し、赤城山南麓の赤城幹線水路と榛名山東麓の榛名幹線水路及びそれに付随する支線等を利用し、農業用水や水道用水を受益地に供給しています。

これまで、施設周辺の戦国時代について紹介してきましたが、末期になると取水口方面の北側は上杉氏が、赤城幹線側の東側は北条氏が、榛名幹線側の西側は武田氏が支配していました。

1. 混乱の上野国

永禄9年（1566年）9月奮戦むなしく長野氏が武田信玄の侵攻により箕輪城が落城すると西上野は武田氏に領国化されてしまいました。また、同年に厩橋城を任されていた上杉家直臣の北条（きたじょう）高広が北条に寝返った事により上杉勢は大幅な撤退を余儀なくされました。これにより北に上杉、西に武田、東に北条と三勢力が入り乱れている状態になってしまいました。

この頃甲斐の武田、相模の北条、駿河・遠江の今川と甲相駿の三国同盟を結んでおり、北条氏康は武田と共同で上杉

と関東諸侯の連合軍と対抗することで関東での抗争に再び優位な立場となりました。この頃氏康は家督を世子の氏政に譲り自らは後見として隠居しています。永禄11年（1568年）今川義元が織田信長に桶狭間の戦いで討ち死にすると今川の勢力は徐々に衰え、武田氏は駿河侵攻を開始し、三国同盟は崩れ北条との同盟も破棄されてしまいます。

今川の滅亡に際し、北条は越後上杉と同盟を結び武田領国への圧力を加えます。この同盟により上杉方には上野国では沼田と厩橋にしか支配圏の無かった上杉謙信の関東管領職と上野・武蔵北辺の一部の領有を認め、北条氏は相模・武蔵の大半の領有を認めることで合意しました。

これにより、上杉謙信は、停戦と支配圏の拡大には成功しましたが、反北条の関東諸侯・豪族の不信感を生み、それらの諸将達は武田氏へとなびいてしまいました。さらに



武田信玄が織田信長・足利義昭（室町将軍）を通じて上杉との和睦が成立すると北条・上杉の同盟は不安定なものとなりました。

元龜2年（1571年）北条氏康が没すると氏政は、越相同盟の悪化によりこれを破棄し、同時に甲相同盟を復活させ、北条、上杉の対決の構図が蘇り、再び上野国の勢力図も過敏に影響を受ける状態になります。

元龜3年（1572年）武田信玄は徳川・織田領国への侵攻を開始し、西上作戦を敢行し三方ヶ原の戦いで勝利しますが、その途上持病が悪化し撤退を余儀なくされ信濃において没し、後継は武田勝頼が継ぐこととなりました。

上杉謙信は越相同盟破綻後、天正2年（1574年）再び上野国に進出し北条氏政と利根川で対陣します。しかし、謙信の関心は越中国に向けられていて決戦にまでは至りませんでした。氏政はさらに勢力を拡大してゆき、下野、下総の上杉勢力を一掃し、南関東における盤石の地位を築き上げます。

天正6年（1578年）上杉謙信が死去すると後継者を巡り謙信の甥で養子の上杉景勝とやはり謙信の養子で氏政の実弟の上杉景虎（謙信に気に入られ、景虎の名を貰う。）の間で御館の乱が勃発します。景虎への援軍を越後に派兵し、自らも厩橋城まで出陣し同時に同盟者である武田勝頼に援軍を要請し、勝頼は北信濃に出兵しますが、上杉景勝は北信濃の上杉領や上野国沼田の割譲を条件に勝頼と和睦を謀ります。（甲越同盟）

北条軍は越後に入り景虎の援軍に向かおうとしますが、坂戸城（新潟県南魚沼市）での頑強な抵抗に遭い、冬となって雪のため撤退を強いられました。翌年景勝が乱を制して景虎が敗死すると勝頼の裏切りにより越後進出を阻まれた氏政は、甲相同盟を破棄して三河国・徳川家康と同盟を結んで駿河の武田領を徳川と挟み撃ちにします。上野国では勝頼の攻勢が続く、上野・下野の諸侯が武田方に転じたため氏政は上野での地盤が劣勢に陥ることとなり、天正8年（1580年）中央で勢力を増大させていた織田信長に臣従を申し出ています。この年氏政は氏直に家督を譲って隠居しますが、引き続き北条家の政治及び軍事の実権は掌握していました。

2. 武田家滅亡から北条支配へ

氏政は、天正10年（1582年）織田信長が嫡子・織田信忠を総大将に織田四天王の一人・滝川一益を軍監とした軍勢が甲州征伐に乗り出すとこれに呼応し駿河の武田領に侵攻します。勝頼は天目山の戦いで正室・桂林院（氏政の妹）と共に自刃し名門甲斐武田氏は滅亡します。

信長は、さらに滝川一益を上野国厩橋城に派遣して関東管領とし、上野西部と信濃国の一部を与え、関東統治を目論みます。北条は氏直に織田家から姫を迎えて婚姻し、織



田の分国として関東の一括統治を願いますが信長からは明確な回答は得られませんでした。しかし、織田家の関東支配には協力的で信長の勢いを恐れており、織田との友好関係を保持しようとしていました。

同年、京都本能寺において信長が明智光秀の謀反により死去したことを知った氏直は、最初は一益に引き続き協調関係を継続することを通知していましたが、その後



氏直に上野国奪還を命じ、5万6千の大軍を派兵し滝川軍と対峙させました。北条軍は滝川軍の3倍の兵力で、緒戦では敗退したものの決戦（神流川の戦い）で大勝し、敗走する一益を追って碓氷峠（群馬県碓氷郡）から信濃に進出し、真田昌幸などを取り込みながら信濃東部から中部に懸けて占領下に置きました。

一方徳川家康は滝川一益が本国（伊勢）まで敗走したため、空白地帯となった甲斐国に進出し北条軍にあった真田昌幸を調略し、北条軍と対立します。北条は対陣が不利となると氏直と家康の娘の婚姻により和睦の道を選択します。この和睦により甲斐・信濃を徳川領に上野国を北条領に定められますが、徳川方に付いた真田昌幸はこの和睦により上野国・沼田を北条に明け渡すことを拒み上杉景勝に寝返り、上田・沼田城にて徳川・北条と抗戦することとなり、小田原征伐の引き金となる名胡桃事件の伏線となってしまいました。

北条氏は、天正11年（1583年）古河公方の足利義氏が死去すると権力を掌握し、利根川水系と常陸川水系の支配を確保し、流通・交通体系を支配したため、関東の反北条連合は従属か徹底抗戦の二者択一を迫られます。こうして北条氏の領国は最大版図を築き上げることとなりました。

3. 小田原征伐から家康入府

中央では信長を倒した明智光秀を討ち、信長の天下統一を継承した豊臣秀吉が西日本の統一を果たし、東国制覇をめざして動き出しました。秀吉は関東惣無事令を発令し、関東における大名間の私闘が禁止されました。

北条氏直は秀吉との戦いを想定し、軍事力の増強を謀ります。一方では天正16年（1588年）には徳川家康の仲介を受け叔父の氏規らの穂





小田原城天守閣

健派を上洛させ一時は豊臣家との関係は安定します。翌天正17年、真田昌幸と争っていた上野国利根沼田領の所有についての調停を秀吉に要請します。秀吉は沼田城を含む沼田領の3分の2を北条氏に名胡桃城を含む3分の1を真田氏に分割する裁定を下し、北条氏政が12月に上洛する約定となりました。7月には北条側に沼田の領地が還付されますが、氏政は新たに翌天正18年の上洛を申し入れます。秀吉はそれを拒否し、再

び関係悪化の状況に陥ります。

10月氏直の叔父氏邦の家臣で沼田城城代の猪俣邦憲による名胡桃城奪取事件が起こります。これが秀吉の出した関東惣無事令に違反するとして秀吉は、諸大名に北条討伐の出陣用意を促し、北条氏に対しては名胡桃事件の首謀者を処罰し、即刻上洛するよう要求しました。

氏直は、上洛した場合氏政を抑留するか国替えの命令を受ける可能性があるため上洛出来ないことと、家康が秀吉に臣従した際の扱いとに差があることを挙げ、抑留・国替えがなく安心して上洛できるよう要請しました。この態度に業を煮やした秀吉は、北条氏の上洛・出仕拒否を豊臣家への従属拒否とみなして諸大名へ正式に北条追討の命令を下しました。

北条氏は直ちに北条領国内の家臣や他国衆に対し小田原への参陣を命じ迎撃態勢を整えて上野国境では初戦で勝利し、駿河・伊豆国境方面に布陣する豊臣諸将に対しても戦意は旺盛でしたが、山中城（静岡県三島市）、葦山城（静岡県伊豆の国市葦山）、下田城（静岡県下田市）が落とされ、秀吉が沼津に着陣する頃になると小田原城に籠城を開始します。上野国では松井田城で守備軍2,000名に対し前田利家を大将に35,000名の北国勢が猛攻をしかけ、北条軍は連合軍の前に激しく抵抗しますが20日あまりの内に降伏します。その後厩橋城、箕輪城と上野の各城を開城勧告で戦わずして攻め落としてゆきました。その理由は、各城の主力は小田原本城に集められ、残った兵士は最低限の守備兵を確保できない状態で、その内訳も中高年や農民であったため城を包囲されると直ちに開城したようです。

4月から続く小田原城の籠城は、多少の小競り合いがあったものの、6月に入ると城の完全包囲や水上の



海上封鎖により外部との連絡が出来なくなり、士気の低下が著しくなりました。また、秀吉がその権勢を小田原方に見せつけるために築いた石垣山一夜城が完成したことが決定的な打撃を被ることとなりました。

氏直は和議を結ぶことを決意して7月5日に秀吉方の武将・滝川雄利の陣所へ赴き、自らの切腹により城内の将兵の助命を請い、降伏しました。秀吉はこの申し出を神妙とし、氏直が家康の娘婿であったこともあり助命されますが、その他一族、重臣については切腹を命じられました。氏直はその後高野山で謹慎生活を送ります。

この争乱の後秀吉は、徳川家康に対し、駿河国、遠江国、三河国、甲斐国、信濃国の5カ国を召し上げて北条氏の旧領、相模国、伊豆国、武蔵国、上野国、上総国、下野国の一部及び常陸国の一部の関八州に移封することを命じました。この移封によって150万石から240万石の大幅な加増となりましたが、北条氏の残党の不穏な動きもあり、また、古くから縁の深かった三河の地を去ることとなりました。

家康は江戸城を拠点に有力家臣を重要な支城に配置して関東統治にあたりました。これにより上野国の情勢も安定し、藩の統廃合もありましたが、以降平穏な暮らしを得ることとなりました。

なお、上野国に配置された有力家臣は以下のとおりです。

領地名	石高	家臣名	領地名	石高	家臣名
箕輪後に高崎	12万石	井伊直政	大胡藩	2万石	牧野康成
館林藩	10万石	榊原康政	吉井藩	2万石	菅沼定利
厩橋後に前橋	3.3万石	平岩親吉	総社藩	1.2万石	諏訪頼水
白井藩	3.3万石	本多康重	那波藩	1万石	松平家乗
宮崎後に小幡	3万石	奥平信昌	沼田藩	2.7万石	真田信幸
藤岡藩	3万石	松平康貞			

★関東惣無事令

豊臣秀吉が関東・奥州に向けて天正15年（1587年）12月に大名間の私闘を禁じた法令で、刀狩令や海上賊船禁止令、喧嘩禁止令など私闘を抑制し、大名間の領土紛争などは豊臣政権がこの処理に当たり違反するものは厳しい処分を下すと宣言している。

また、秀吉は自身の立場（関白）を明確に示すことで、天皇の命令によって私闘を禁止するという立場を取っている。

★石垣山一夜城

太閤一夜城とも呼ばれ、豊臣秀吉が天正18年（1590年）の小田原征伐の際に小田原城の南西約3kmにある笠懸山の山頂に築いた陣城。小田原城からは見えないように築城し、完成後、一気に周囲の期を伐採し、小田原城側からは一夜にして築城したかのように驚かせ、戦意喪失を引き起こした。